

方言を伝える

大野 貞男
小林 隆 編

東日本大震災は方言研究者の活動の幅をぐんと広げた。以前は消え行く言葉の記録が主な仕事だったが、震災後、被災地の方言が一気に消滅の危機に陥り、その一方で、被災者を励まし、復興への意欲を高める言葉として各地で活用された。その中で、多くの研究者が次世代も方言を話せるようになる継承活動の支援へと踏み出した。

本書は被災5県（青森、岩手、宮城、福島、茨城）の大学が文化庁の支援を受け、「方言を伝える」という共通の目標を掲げて取り組んだ活動報告である。

活動は「会話を記録する」「学習材を作る」「方言に触れる場を作る」の3分野。「会話を記録する」では、記録方法として自由な会話と、頼む、感謝するなどさまざまな場面を設定した会話の2種類があり、多様な方言の使い方を伝える上では場面を設定した方が有効であると指摘、具体的な手法を紹介した。

被災地 危機越え継承

「学習材を作る」では、学校教育での使用を目指して試作した茨城方言テキストを取り上げ、地域の言葉を調べ、語尾などの特徴を知るだけでなく、方言を口に出して話すように促す工夫を課題として挙げた。

「方言に触れる場を作る」では、八戸、釜石、仙台の3地域の方言を使い、観光地や特産物など地元の魅力を伝える内容の映像コンテンツをネット上で公開した取り組みを報告。パソコン画面を見ながら、登場者に代わって話すことができる仕組みで、ワークショップでは小学生も積極的に方言を話したという。

このほか、東京電力福島第1原発の事故の後、長期の避難生活を送る人々へのインタビューも掲載。「方言とは何か」の問いに対し、多くの人が「ふるさと」「空気のようなもの」と答え、方言が掛け替えのない存在であることをあらためて示した。

ひつじ書房03(5319)4916
||1836H。

